

をも濕ほどそ、ぎてよし、牡丹のめにどろ付たる所あらば、白水にてあらふべし、木に白虫付時はを不洗ば木枯る也、實の蒔やうは、六月土用過七月初に實を取則蒔なり、茶がら壹升に土をませ一粒づ、並て、其うへに茶がら五分ほどかけて、蛤貝かぶせて置なり、二月中旬の比右の貝をとるべし、

〔草木育種下品〕牡丹本草 和名はつかぐさ訓花ふかみぐさ延喜なとりぐさ万葉といふ、山城にて多作又大坂にて接つぎ江戸へ送、其類多し、秘傳花鏡に百三十一種を載、總て赤土に合肥を切ませ植てよし、又砂を少し入たるもよし、接法ハ常の牡丹の砧たねへはす接にしてよし、群芳譜に牡丹八月接べし、又枝を扞さして活といふ、略中肥ハ人糞を多土へ切ませ、百日ほどねかし置て用べし、又猪屎よたのんを用、又狗糞を用て妙なりと花鏡に見ゆ、然ども群芳譜に、牡丹尤忌犬糞と云り、種樹書曰、牡丹花上穴如針孔、乃蟲所藏處、花工謂之氣倉、以大針點硫黃末針之蟲乃死、或百部草塞之、貝原花譜曰、牡丹冬至前後、鐘乳粉と硫黃とを末し、根を掘開て周圍に置べし、來春花盛なり、牡丹道知邊に小科を白子と名く、分植べしと云、

〔草木錦葉集緒〕牡丹實蒔并植作方

牡丹の事ハ上方より下る品を植置たる事ハあれど、實蒔其外作りたる事一切なし、予が父野菜水牡丹の實蒔して作りたるを、見聞し事どもを左に記す、

牡丹實蒔は七月末頃、實黒く成たるを採、すぐに實少しなれば、土器に入、多くおらば土ほうろくへ乾きたる土を誠に少し厚一分程入、其土の上へ實を程よく並べ、古板にても蓋をしてかりしたる也、水地にてなき場所を一尺五六寸掘て、右の土器を埋置、寒明て四十日程過掘出し、花壇にても畑にても土を少し高くして植る、其節土器の中にて根出あるゆへ、日の當らざる様にすべし、當所ハ寒氣強きゆへ、初より地へ蒔てハ根計出て芽出ざるゆへ、列て枯る也、暖氣なる土地にて